美之國

大正十四年四月二十三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十六年四月二十八日印刷納本　昭和十六年五月一日發行　第十七卷第五號（通卷第百九十二號）

五月號

5

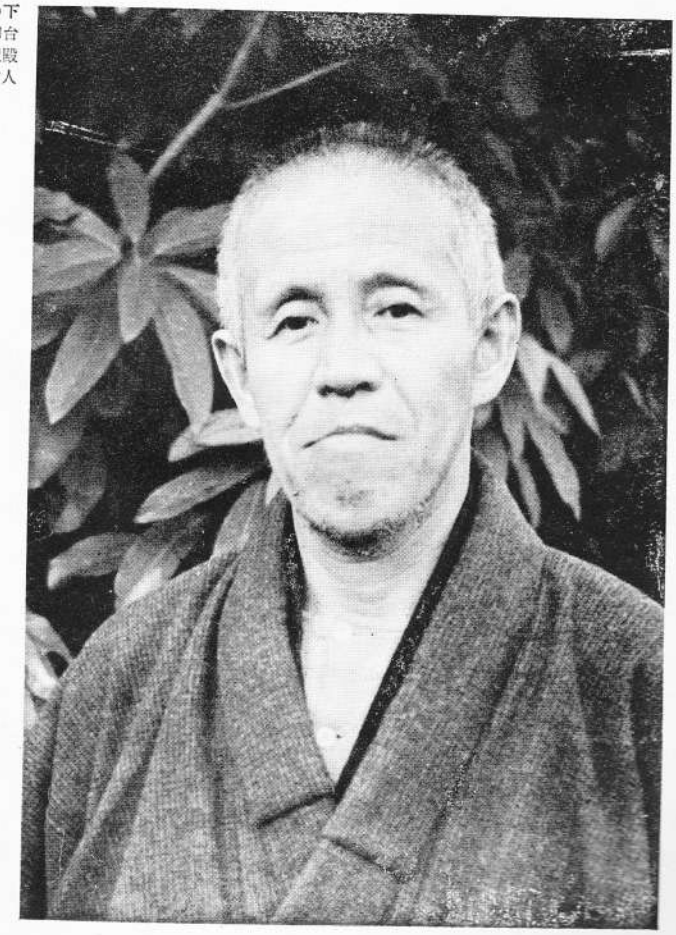
特輯　古典入門
　　木島櫻谷作品と藝術

大塔宮　（作歳七廿）　　櫻谷文庫藏

様を描く事、畫面いつぱいに餘白を少くして物を描く事、バツバツとタツチの勇壯である事などをあげられる。これがいはば青龍社流と見ていゝ、龍子御大の剛健なる美術への信念が、斯様な結果おそらく龍子氏の狙ひはそれでいゝのではなからうか。傳統に對する理解、民族性への望郷などに關しても青龍社には獨自の解釋が成立してゐると見てゐる。

な風潮少しでもある中で此の人達は、その健剛さを個性を持つて理解し、繪畫の上で實踐しようとしてゐるところにある。主宰並に同人諸氏の授賞心理にはたしかにその警告があるものと見たい

既報の如く明治、大正、昭和に於ける日本画壇の巨匠として文運に貢献する所甚大であつた故木島櫻谷氏の遺作展は四月二日より六日迄財團法人櫻谷文庫、未亡人春氏他遺弟一同主催の下に京都岡崎公園美術館で盛大に開かれた、寫眞は同會場へ御台臨親しく御巡覽遊ばされし京都御在住の久邇宮(故多嘉王)妃殿下(向つて御右端)でその左は御附きの方、小林雨郊氏、未亡人である。



在りし日の木島櫻谷氏

時代と作品

―作家生涯の推移―

―櫻谷遺作展覽會を見て―

石川宰三郎

京都畫壇一方の雄であつた木島櫻谷氏が、さびしくも痛ましい終焉を遂げられたのは、昭和十三年の秋十一月だから、今年は三周年明けの春である。その陽春四月の好季を卜し、櫻谷文庫や、故人周邊の人々、門下の人たちにより「櫻谷遺作展覽會」の開催せらるるを聞き、私はぜひあの眞摯な、文人家氣質のやうな故人の遺業をしみじみ鑑賞したいと思ひ、萬障差し繰つて京洛の地へ久しぶりに旅立つたのである。

折から、圓山、清水は云ふ迄もなく、蹴上、岡崎のあたり花爛漫の好シイズンであり、岡崎の美術館に、あの愼ましくも、寂しさうであつた故人の俤を偲ぶには、むしろあまりに感傷的であるのを想ひつゝ、敬虔な氣持でしづかに拜見出來たのを喜びとする。

○

大體目錄に從ひ、陳列の順序で所感を述べると、最初に絶筆だといふ「憶景年先生」といふ書幅があつた。

遐齡八十氣猶豪　巨腕揮成捲怒濤
老鶴遠然飛不返　一聲清啄入雲高
涓滴未酬海嶽恩　追憶往時暗銷魂
秋宵猶記挑燈坐　數侍先師聽畫論

といふので、克明な櫻谷畫伯が、如何に先師今尾景年翁を追慕し、自ら死のその直前にある事をも(勿論豫期はしまいが)打ち忘れて、ひたすらに過去の恩誼に感激してゐたかが偲ばれて涙ぐまれた。

○

櫻谷氏は、明治十年三月六日の誕生といふから、二十七歳、京都美術協會出品作だといふ「大塔宮」は、明治二十六年の制作になるわけだらう。その若年にしては、全く驚嘆に値ひする大力作、もちろんその頃のものであるから、創作的價値から云ふと特筆するがものはなき迄も、この「大塔宮」の剛壯悲痛な活畫面は、たしかにこの人ならではと思はせる切實極まるものであつた。當時の歴史畫としては、後まで傳へられてよいであらう。「日蓮上人尊影」といふのも、ほぼその前後のものであらうか、これまた敬虔な氣持で描かれた作らしい。

○

明治四十年文展出品で、菱田春草の「落葉」とともに二等賞の榮冠を贏ち得た「時雨」、これはまたぐツと沈靜な、哀愁をそそるやうな六曲一双の大畫面である。これを見ると、何よりも當時始めて開かれる官展――文部省主催展覽會といふものに對して、當時の青年作

既報の如く明治、大正、
運に貢献する所甚大であ
より六日迄財團法人櫻谷文
に京都岡崎公園美術館で盛
臨親しく御巡覽遊ばされし
下(向つて御右端)でその左
である。

家が懸命に精力を打ち込んだかといふ事がはツきり分る。それのみならず、櫻谷氏のごときは、偶々見せられた前二作のやうな歴史、人物畫の範疇以外、自然の風物に對して、如何に純眞な氣持でぶつかつて行かうとしたかが窺はれ、その意味でも、沈んだ、晩秋の感覺のうちにひたぶるに身を置いた當時の若さ、感激が今もなほ生動してゐるものあるを想はせて餘りある。「落葉」の不朽の價値とは別なものであるにせよ、些かも反感の起らない、純眞な作と云へよう。

「釋尊」は、京都妙滿寺の爲めに描かれたもの、之にも櫻谷氏らしい克明さがよく窺はれた。

○

「和樂」は、四十二年第三回文展で三等賞を獲たもの、之には右半双に一家團欒の趣きを、左半双に農婦等が打ちつれて家路に歸るところを描き、配するに仔牛、猫、鶏、犬等の田家の動物を萬遍なくあしらひ、以て渾然たる闔家全慶の趣致を發揚しようとしたもの。今日で云ひば、農村の和樂、融睦、乃至勤勞等を如實に、委曲精細を盡したもので、その行き方には、景年師は無論、遠く圓山の始祖應擧の慣例的手法と通ずるものさへあり、斯ういふところに、當時の京都の畫風のまだまだ地方的、傳統的觀念に卽し過ぎた傾向のあるのは否めない。しかし、それにしても、一々の人物を克明に、懇切に、些しのごまかしなしに描破しようと力めた作者の眞面目さは充分に受け取る事が出來、靜的、平和的な畫題に心から打ちこんだ跡は微笑ましく味解される。

○

「勝乎敗乎」は、四十一年第二回文展にて堂々二等賞を獲得した不朽の名作、これは六曲一双の左右とも戰陣の眞ツ只中に逸り猛る馬を進める武將數多く突撃姿勢で附き添ふ士卒を配らひ、雨霰と降り來る矢面の凄烈さを活寫したもの。老將あり、若武者あり、いづれも活氣横溢、ここを先途の大激戰とおもはれるが、最も異とすべきは、戰ひの最中であつて、題名の如く勝か敗かの見境ひさへつかぬ最高潮の場面である事だ。時代は源平か、鎌倉以降かだが、兎まれ弓矢を主とする戰闘で、甲冑武具の華々しさは云ふも愚か、一軍の士氣いやが上に高潮してゐるけれども、肝腎な勝敗の岐れ目が分らぬといふところにこの繪の最も素晴らしい緊張味がある。多くの武者繪は勝敗の決した所か、歸趨明かならんとする所を描くにこれは未解決で華麗な戰場であるのが制作後三十餘年後の今でもひどく活々地(ヴイヴイド)に見られ、武將、大將その何人たるを明かにせぬのも却つて興深く考へられる。要らぬ詮索を超越して、この活躍の場面に惹き付けられた實感を作者に感謝していゝと思ふ。そしてまた、これが當時としては最も新らしい武者繪の風であつた事だらう。

○

講道館所藏の「奔馬」の圖もなか〳〵の大作、丙午秋十月とあるから、「勝乎敗乎」に次ぐ頃であらう。これは專ら、馬の活躍を描いたものだが、力の充ち溢れた點で、人物のない丈け、前者に近い氣魄を示した。

西村總左衛門氏藏「水墨山水」の六曲一双も見事で、これには、水墨丈けに前掲諸作とは全く異なる妙所が窺はれた。「夕映」(森源之助氏藏)も面白い出來だが、松本さだ氏藏「椀久」には、櫻谷氏に珍らしい瀟洒な面が現はれて、特異な印象を受けた。

利久六曲一双といふ變つた型の「薄」(秋山覺次郎氏藏)も洒脫なものであり、「瀑布」圖双幅は雄勁。大橋松治郎氏藏「群芳之圖」は、四季とりどりの花といふ花をよくも華麗に描き分けた。

○

「寒月」は、大正元年秋の文展に出品、三度び二等賞の榮冠を獲得せるもの丈けあり、何とも云へぬ肅條たる冬の夜の凄婉さを發露した名作である。所々に枯れ草や、わづかの常盤木も見られるが、大體は青藍色の孟宗竹あまたある竹林。而かも土坡は一面の殘雪、そ

朽の名作、これは六曲一双の左右とも戰陣の眞ッ只中に逸り猛る馬を進める武將數多く突撃姿勢で附き添ふ士卒を配らひ、雨霰と降りも來る矢面の凄烈さを活寫したもの。老將あり、若武者あり、いづれも活氣横溢、ここを先途の大激戰とおもはれるが、最も異とすべき

季とりどりの花といふ花をよくも華麗に描き分けた。

○

「寒月」は、大正元年秋の文展に出品、三度び二等賞の榮冠を獲得せるもの丈けあり、何とも云へぬ肅條たる冬の夜の凄婉さを發露した名作である。所々枯れ草や、わづかの常盤木も見られるが、大體は青藍色の孟宗竹あまたある竹林。而かも土坡は一面の殘雪、その雪に點々足跡を殘しつゝ四邊をうかがふやうに辿り來る狐一尾、寒月は遠く竹林のあなたの空高くうつすりと輝きわたつてゐる。すべての狀景が巧みたるにあらで巧みたるが如く、寫生を基としたに違ひないが、むしろ寫實味を脱し、何處かに縹渺たるユートピアが感じられる。冷凄といふか、靜寂といふか、いづれにしても狐狸さへ出沒する一脈の凄みが、鬼氣迫るといふほどでなく、やんはりと全景を統べ整へてゐる。そこに何かなし底深いアトモスフイアが偲ばれて、靜的場面でありながら含蓄の測り知れないものあり、殊に竹の林立し、あるかなきかの風に搖めくやうな寒々とした情趣は全く一種獨特なもの、右半双の下端に凍てついたせせらぎの走つたあたりにも心にくい用意が掬まれた。これまた三十年後の今日なほ活き々々と神秘感を傳へて、ユニイクな立場を示す好作品と云はざるを得ない。

○

「たけがり」は、それから十年あまりを經た大正十三年の帝展出品。これは、恐らく桃山頃か、德川初期風俗の武家の男女達が、たとへば有馬山あたりの茸狩りに酒興し、一方にはその伴れらしき女性、童女が茸を籠に採り來る風情。松の描き方は、彦根屏風などのそれに近く、全體に京洛附近の閑雅な秋のすさびをよく傳へてあるが、以前の諸作に比べると甚だ悠暢たるものがある。

「凉意」は、大正三年の文展出品、唐人物に芭蕉、赤い卓、支那風俗を描けるものとして作者が力めて古典味を出すべく苦勞したやうに見られる。

○

名作「寒月」に續いて、大正二年文展無鑑査出品の「驛路の春」が、前者の凄婉なのと對蹠的に浩蕩たる陽春譜を奏でてゐるのも興ふかい。これまた六曲一双の大作、大名なんどの姫君の東下りの道中でもあらう、驛の茶亭の幔幕せるに從者、侍女たちと一憩みしてる所、右半双の楊柳春風に靡く傍には、白、黑二頭の駄馬、その馬子などを配し、いづれを見ても、春風長閑に、江戸時代の道中双六の好場面をさながら展開せるもの、ただ、この作品に至つては、閑雅はすなはち閑雅、優麗はすなはち優麗なれど、むしろその風俗的興趣に淫せる嫌ひなからず、作品としてはむしろ右半双のみの二頭の駄馬と楊柳を脊に、あたりの情景を樂む馬子一人ゐる圖丈けにして置いた方が、却つて餘情を有たしたではなからうか。

左半双によつて絢爛さを添へたのはよいが、幔幕、柳、老樹、從者、侍女の面々、それぞれの調度、器具などあまり說明に過ぎ、餘韻の掬すべきに乏しきは一瑕瑾でがなあらう。

○

大正五年文展出品「港頭の夕」も、よく港頭の感じを寫生し、實感を或る程度まで出してるが、やはり說明が勝ち過ぎたかの感を與へる。技熟し、業定まつて、却つていよ〳〵畫面の饒舌になりたるものではあるまいか。

出品畫でこそないが、住友男爵家藏の六曲三双、「燕子花」「柳櫻」「菊花」之圖は、まさに渾然たる技法、たくみもたくんだれど、色調技術よく冴えたものの實例である。

○

大正四年文展出品「うまや」は、相當に迫力ある作、實感も出てゐる。同六年文展出品の「孟宗藪」これまた前者とおなじ六曲一双、うまやの方はおなじ素樸さにもほとんど嫌味がないが、後者の老人と子供を配したのには、聊かながら芝居氣めいたものが目立つ。このあたりに、若干後者の出品氣分に甘さが出たのではあるまいか。同十五年帝展出品の「遲日」は、唐美人と童兒、これがまた多少とも形式化に入つてゐる。

大正七年文展出品の「暮雲圖」六曲一双は、層々峨峨たる山嶺の間に、暮雲の靉靆たる風情を描いたもので、充分力のこもつた佳作。

「驛路の春」はじめ、これ等の多くは、三重縣小津與右衞門氏の愛藏品である。今にして思ふ、「驛路の春」と云ひ、「たけがり」と云ひ、「うまや」「暮雪」等幾多ロマンチックな題材、社會的に喧傳されたこれ等の作品を愛藏する小津家もまた幸せなるかなと。

○

昭和に入つて二年帝展出品の「灰燼」は、やはり小津家藏、城まさに落ちんとして、城主を始め夫人姫たち、侍女などの或は涙を拂ひ或は相擁して悲しむ劇的シインであるが、ここまで說明的になり了つては餘韻の却つて味ひ難いものがある。史的創作の立場からは、やはり「勝乎敗乎」のやうな解釋の餘地あるものの方が後世感ずるものに含みを殘す事になりはしないか。

さう云へば、大正十年帝展出品の「婦女四題」十一年の「行路難」等も、いささか說明に墮したる嫌ひがないでもない。八年帝展出品の「松籟」も、曾ての「時雨」のやうに自然に肉迫する態度とは大分異なるものがあるが、中にも某る寒驛の待合室に取材したらしい「行路難」のごときは、あまりにも新派悲劇のロオマンスでも取扱つたかのやうに鼻につく。技法もよし、些かのケレンのない、眞摯そのものと云ふべき櫻谷氏の作品としてこれ等は題材の採り方、また特にその扱ひ方に安易を求め、徹底せる解釋を吝まれたきらひなきに非ず、惜むべし。

○

昭和三年帝展出品の「獅子」は、久しぶりでそれ等の俗臭を罷脫した力作といふべく、再び堂々たる氣構への下に雌雄の獅子を描き、殊にはつたと右方を睨まへる雄獅子の立ちあがれる形のごときは一味の凄壯さを思はす。いつでも技能に於ては充分の用意ある人、殊にこの種動物の姿態などは最も得意なものであつた事が肯かれる。五年帝展出品の「望鄕」も多少の通俗味ありながら佳作に屬すと云ふべく、六年のおなじく「畫三昧」は、ややイージイ・ゴーイングの部類に墮せりと云ふべきか。

七年帝展出品の「角とぐ鹿」は、往年の「時雨」の一齣に調子を强めたりと思はす程の佳作、見つけ所も久しぶりに自然に肉迫した、生彩のあるもので氣持の充實著しきものがある。鹿の姿態、特にその活躍の樣相を活寫せる事斯くのごときはあまり類なしとも云ふべく老手なるかなと歎稱させる。八年帝展第十四回に「峽中の秋」圖を出されたのが官展出品の最後であるらしく、この作も心を入れての出來榮えではある。

官展ではないが、昭和十一年大禮記念京都美術館展出品の「苦むす庭」は、西芳寺を描いたものであらう、寫生も綿密周到、題意の苦のいともしなやかに味深く描破されたもの、色感も優れた出來、櫻谷文庫藏である。

それと、前揭帝展出品の「獅子」に優るとも劣らない久邇宮家御貸下の「獅子之圖」、これは素晴らしい。まさに迫眞の技であり、描法は古典に則り、莊重に近いものだが、徒らに塗沫の餘になつたものでなく、若干の金泥をまじへたのなど一々効果的である。再び老手なるかなと歎稱する所以。

○

目錄順で、一わたりずツと見た感想のあらましは以上の如くだがさて考へて見ると、櫻谷畫伯と時代、人生のさかりと老境、いろいろな思ひがこの遺作展拜見中にもさまざまに考へられた。何としても、櫻谷氏の全盛期は、明治四十年の文展開設當時、「時雨」を始め「勝乎敗乎」等から大正元年「寒月」に至る頃の數年間にあつたと云つてよい。その頃の氏の勢ひは素晴らしいもので、作家としての緊張も尋常一樣のものでなかつた事がよく窺はれる、この氣勢は「驛路の春」「うまや」大正七年の「暮雪」乃至八年の「松籟」ごろ迄は兎にも角にも持續され、卽ち十有餘年の間櫻谷氏の元氣一杯な時代が續いたものと見れば見られる。

味の凄壯さを思はす。いつでも技能に於ては充分の用意ある人、殊にこの種動物の姿態などは最も得意なものであつた事が肯かれる。五年帝展出品の「望郷」も多少の通俗味ありながら佳作に屬すと云ふべく、六年のおなじく「畫三昧」は、ややイージイ・ゴーイングの部

木島櫻谷氏の藝術

吉副禎三

木島櫻谷氏逝つて四年目、故人の雅號に因む櫻花爛漫たる四月二日から六日までその遺作展は京都市美術館で催された。筆者は櫻谷氏逝去の翌月發行の本誌(十三年十二月號)に『木島櫻谷氏の禁慾主義』と題する拙文を寄せたが讀者の或る者は櫻谷氏の禁慾主義に驚ろいた。彼も亦一部の人々と同樣に故木島櫻谷氏を物質慾の强い畫家だと誤解してゐた一人だつたらしい。其の後遺族により遺産(貯

些かの懸念は、大正十一年「行路難」の如き意外な作風を示された事に始まり、何とはなしに作者の煩惱時代がこの頃から纏綿したものではないかと思はれる。丁度、大正七八年頃は文展が改組されて帝展となり、京都では土田麥僊、榊原紫峰氏等によつて新鋭運動としての國畫創作協會が勃興し、他方また自由畫壇の如き保守的團體が起るなど異常な空氣に蓋はれてゐた時代と對比すれば、自づからその推移のやむべからざるを察せしめる。この邊の事については、他日なほ「作家と時代」の稿を別に起して見るつもりだが、他面櫻谷氏の場合は、繪畫專門學校の教職に漸く不安と動搖とを感じ、大正十四年に十五年間に亘るその職を退くに至つたなど彼と是と關せざるが如く、關するが如き微妙な繫がりをも認めてわるくないだらう。

○

遺作に就いては、以上で目ぼしき出品物中心の批判の大要は了つたが、なほこの外に、數々の日常制作或は依頼畫中の優秀な幾多のものの存するのを忘れてはならない。

たとへば、大橋松治郎氏藏の「孔雀圖」の優麗なる、鈴木孝次郎氏藏「松上の鷹」の高雅雄逸なる、また田附政治郎氏藏「懷舊」圖の情緒纏綿として而かも史實の妙諦を傳へしが如き、いづれも作者本然の妙技の極致を發揮せる實證であらう。殊に、川崎克氏藏の「春秋狐狸之圖」のやうなのは、双幅の一方に山櫻、一方に萩の花、狐と狸とがいとまめやかに活寫されて生彩今に躍如たるものである。これ等は決して「時雨」や、「角とぐ鹿」の片鱗に過ぎぬといふのでなく、むしろより以上の鍛錬を加へたものもなきに非ず、その事は、なほ他の諸作にも一々吟味言及したいのだが、今その遑なきを惜しむ。

偶々、田附氏藏の「皆春帖」や、大橋氏藏の「閑適帖」等にも小品ながらぴりりとした味ひを示せるがあり、また櫻谷文庫藏かと憶える半折の鹿、菖蒲、炭燒きなどとりどりに秀逸なもの、芳山懷古の詩を併せ書した水墨山水なども、櫻谷氏の文人畫家的氣韻を想察するに足りたが、數點の寫生帖にはその克明溫雅な畫風の溫床の發露せるものあるを痛感せしめた。

秋と春と、死と生と、時代の推移——いろいろな思ひのそれからそれへと湧起した、近ごろ珍らしい趣きある遺作展の一つであつた事に感動、私はその日故人の溫情を偲びつつ遙々等持院の墓所にも額づいて花散る夕に、歸宿した事であつた。

金十五萬圓、書畫、書籍、武具、住宅、其の他遺品藏品など）全部を寄附され、財團法人『櫻谷文庫』設立が發表されて一般人は素より櫻谷氏を禁慾主義者と目して居た筆者さへもその美擧と財產の少ないのには驚ろかざるを得なかつた。（世間では財產二三百萬圓とうわさゝれて居た）けだし、斯樣なうわさが傳へられて居たのは櫻谷氏が餘りに潔癖でもあり、象牙の塔に籠つて居た事も原因をなすであらうが、彼等は自己の狹隘にして低俗なる精神によつて他人を推察する事の罪惡を悟つたであらう。

禁慾主義は處世的意味、宗教的意味、道德的意味の三つに區別されるが、その意圖は、より低い、より小なる、又は、暫定的不確定的と見える價値を斷念する事に依つて、より高い、より大なる、又は、恒久的絕對的價値を求めやうとするにあり、精神的ではあるが必然的に消極的に墮するものである。財物を樂しまず、世評に動せず、常に漢詩を愛し、藝術三昧の淸らかな生活をして、さびしく逝つた櫻谷氏のその生涯は禁慾主義に貫かれ、藝術家として美しくも尊いではないか。

故木島櫻谷氏は明治十年京都市の三條室町に生れたが祖父は狩野派の畫家であつた。櫻谷氏は花鳥・山水風景・人物など何れにも優れ天下に名聲嘖々、その藝術は美の探求の規準を自然觀的に求め乍ら形而上方面の內容を浸ませやうとする努力が拂はれ、その私的生活から來た愛他的禁慾的思想が反映して精神的で何れの作品にも愛他的禁慾的な內容が現出し官能的な刺激は輕視された。從つて、感覺的には華美でなく、色彩は澁いが線には險しさがなく、愛に滿ち平和で靜かで鄕愁に似たなつかしさが現はれ、畫格淸高にして韻致に富み、詩的にして淡雅なその畫境を湛へ、その作品を統一するものは常に靜的美であるが、櫻谷氏にも元氣な若い時代があつて武者繪を描き、陳列された二十七歲の作『大塔宮』文展二等賞の『勝乎敗乎』などに於いて强靱な筆致を見る。藝術が發展段階に入つたと目される三十歲の作で有名な文展二等賞の『時雨』は時雨そゝぐ秋の草原に群がる數匹の鹿に取材されたが既に此の作に於いてその生涯を通じる藝術的傾向の範疇が明かにされて居る。有名な文展二等賞の『若葉山』は所有者が祕藏して出品を拒絕した爲見られなかつた事は殘念だが、これも文展二等賞の『寒月』は積雪の月夜に於ける竹藪に一匹の狐・燒群靑を墨の上に塗られて竹が描かれたが、その澁く美しい色感と量感、狐の描寫、それ等による畫面の構成などは作者の非凡な藝術的天分を發揮し、文展三等賞の『和樂』、文展出品の『驛路の春』、同『凉意』、同『うまや』、同『港頭の夕』などは何れも四十歲までの作、『港頭の夕』はさびしい港の夕、大型小型の和船が蝟集して居り澁い色調で船夫や漁夫の生活が描かれ、海の岸の古るい家の窓からは船人の享樂の對照になる一人の美人が思案顏で姿を現はして居る。京極も祇園も行つた事のなかつた櫻谷氏の作品の中に賣女が居るのは面白い。當時の自然主義の影響か？　常に懷にする詩の本からでもヒントを得たものか？　此の作は畫面の構成と賦彩に成功した佳作であるが此の作あたりから櫻谷氏の愛他的禁慾的な傾向が發展段階に入つて居るやうである。また三十六歲の作『驛路の春』は德川時代の裕福な人々の旅行に取材され相當派手なものだが年代が降つて五十六歲の作でやはり旅行者に取材された『行路難』は現代人物の貧しい親子三人に取材され端的に人間苦が描かれ、無意識のうちにニヒリズムが現出して居る。以上に述べた作品は主に靑年時代から壯年時代までの文展出品畫であるが、壯年時代の作らしい六曲一双と二曲一双との四部作の超大作『老松之圖』は金地の屛風に老松と小松、それは構成と賦彩に見事な成功を收め花鳥畫に於ける故人の畫境完成を見る佳作である。又、此れと前後の時代の作らしい『燕子花之圖』は菖蒲に『柳櫻之圖』は櫻と柳に、『菊花圖』は白菊に取材され、此等の三作共六曲一双の金屛風で、何れも空間構成と金地と顏料との色彩構成に成功して優れ、久邇宮家御貸下の『獅子之

三昧にふける櫻谷氏の自畫像であるが、又同時に櫻谷氏の生活哲學
、三觀でもあるばかりでなく、その畫壇生活に於ける佳
品の一致に於いて作者の

のは常に靜的美であるが、櫻谷氏にも元氣な若い時代があつて武者繪を描き、陳列された二十七歳の作『大塔宮』文展二等賞の『勝乎敗乎』などに於いて强靱な筆致を見る。藝術が發展段階に入つたと目

老松と小松、それは構成と賦彩に見事な成功を收め花鳥畫に於ける故人の畫境完成を見る佳作である。又、此れと前後の時代の作らしい取材され、此等の三作共六曲一双の金屏風で、何れも空間構成と金地と顏料との色彩構成に成功して優れ、久邇宮家御貸下の『獅子之

圖』も現實性が把握され美化に成功してゐる。

晩年の作の帝展出品『角とぐ鹿』、同『畫三昧』、京都市展出品『苔むす庭』の三作は何れも故人の晩年を飾るに足る佳作で藝術家としての高い人格と巨匠としての技倆と情操との顯現を見る。『角とぐ鹿』は楓の幹で角をとぐ一匹の鹿、靜動の世界を統一的に展開して精神的な無限の含蓄に成功して佳い藝効果を收め『苔むす庭』はセーム・カラー・ヂスプレーの表現方に依り靜的美を展開され自然景觀に作者の人生觀が完全に吹き込まれた。『畫三昧』は畫架に向つて畫

三昧にふける櫻谷氏の自畫像であるが、又同時に櫻谷氏の生活哲學でもあり、人生觀でもあるばかりでなく、その畫壇生活に於ける佳作の代表作でもある。その題材、內容、表現の一致に於いて作者の禁慾的精神と藝術的主張と天分とを完全に發揮して藝術價値高く、人間の理想を暗示し、畫人の生活を明示する大金字塔である。觀客は自ら襟を正し巨匠の精神生活とその藝術に最上の敬意を表さざるを得ないのである。（四月二十日）

木島櫻谷遺作展覽會目錄

（於大禮記念京都美術館 昭和十六年四月二日ヨリ六日マデ）

久邇宮家御貸下 獅子之圖	櫻谷文庫藏
憶景年先生	
大塔宮	
日蓮上人尊影	同 妙滿寺藏
時雨尊	文部省藏
釋尊樂	妙滿寺藏
和	櫻谷文庫藏
勝乎敗乎	土肥健男氏藏
奔馬之圖	講道館藏
水墨山水	西村總左衞門氏藏
夕照	森源之助氏藏
秋晴	大橋彌兵衞氏藏
槐久	松本さだ氏藏
薄	秋山覺治郎氏藏
春晴	大橋彌兵衞氏藏
瀑布	秋山覺治郎氏藏
群芳之圖	大橋松治郎氏藏
寒月	酒井伯爵家藏
たけがり	小津與右衞門氏藏
涼意	同
燕子花之圖	住友男爵家藏
柳櫻之圖	同
菊花之圖	同
苔むす庭	櫻谷文庫藏
望郷	同
驛路の春	小津與右衞門氏藏
港頭の夕	同
運日	同
懷舊	田附政治郎氏藏
猛虎之圖	大橋松治郎氏藏
灰燼	小津與右衞門氏藏
暮雲	同 井上利助氏藏
春の山	
角とぐ鹿	京都美術館藏
孔雀圖	大橋松治郎氏藏
孟宗藪	小津與右衞門氏藏
獅子	同
うまや	鈴木孝次郎氏藏
扨上ノ鷹	大橋直之助氏藏
老松之圖	明倫小學校藏
教育歷史畫	小津與右衞門氏藏
婦女四趣	同
松籟	
行路難	櫻谷文庫藏
畫三昧	川崎克氏藏
春秋狐狸之圖	櫻谷文庫藏
峽中の秋	田附政治郎氏藏
皆春帖	大橋松治郎氏藏
閑適帖	櫻谷文庫藏
寫生帖	同
吉野懷古詩畫	

木島櫻谷履歷及作畫年表

一、通稱文治郎、字文質、別ニ龍池草堂主人又ハ臨盧迂人ノ號ヲ用フ

一、明治拾年參月六日京都市三條室町東入御倉町ニ生ル、明倫尋常小學校、第二高等小學校ヲ經テ京都市立商業學校ノ豫科ニ學ヒシカ中途退學シテ繪畫ニ志セリ

一、明治貳拾六年壹月、十六歲ニシテ今尾景年ノ門ニ入リ繪畫ヲ修業シ、傍ラ山本豁愚ニ就キテ漢詩ヲ學ヘリ

一、大正元年拾月貳拾四日京都市立美術工藝學校教授ヲ囑託セラル(京都市)

一、大正貳年八月拾壹日第七回美術展覽會開設ニ付美術審査委員會委員被仰付(內閣)

一、大正四年六月四日京都市立繪畫專門學校教授ニ任ス高等官七等ヲ以テ待遇セラル(內閣)京都市立繪畫專門學校教授ニ補シ十級俸下賜セラル(文部省)

一、大正九年拾月拾五日高等官六等ヲ以テ待遇セラル(內閣)

一、大正壹年六月三拾日正七位ニ敍セラル(宮內省)

一、大正拾貳年五月貳拾九日高等官五等ヲ以テ待遇セラル

一、大正拾貳年拾月拾日從六位ニ敍セラル

一、大正拾四年四月九日退職

一、昭和拾三年壹月參日死去ス

櫻谷作畫年表

一、明治四拾年拾壹月文部省展覽會ニ「時雨」ノ圖出品　貳等賞受領

一、明治四拾壹年拾壹月前同會ニ「勝乎敗乎」ノ圖出品　貳等賞受領

一、明治四拾貳年拾壹月前同會ニ「和樂」ノ圖出品　三等賞受領

一、明治四拾參年拾壹月前同會ニ「かりくら」ノ圖出品　三等賞受領

一、明治四拾四年拾壹月文部省美術展覽會に「若葉ノ山ノ圖出品　二等賞受領

一、大正元年拾壹月前同會ニ「寒月」ノ圖出品　貳等賞受領

一、大正貳年拾壹月前同會ニ「驛路ノ春」ノ圖出品

一、大正參年拾壹月前同會ニ「涼意」ノ圖出品

一、大正四年拾壹月前同會ニ「うまや」ノ圖出品

一、大正五年拾壹月同前會ニ「港頭ノ夕」ノ圖出品

一、大正六年拾壹月前同會ニ「孟宗藪」ノ圖出品

一、大正七年拾壹月前同會ニ「暮雲」ノ圖出品

一、大正八年拾壹月帝國美術院第三回展覽會ニ「松嶺」ノ圖出品

一、大正拾壹年拾壹月同第四回展覽會ニ「行路難」ノ圖出品

一、大正拾參年拾壹月同第五回展覽會ニ「たけがり」ノ圖出品

一、大正拾四年拾壹月同第六回展覽會ニ「婦女三題」ノ圖出品

一、大正拾五年拾壹月同第七回展覽會ニ「遲日」ノ圖出品

一、昭和貳年拾壹月同第八回展覽會ニ「灰燼」ノ圖出品

一、昭和參年拾壹月同第九回展覽會ニ「獅子」ノ圖出品

一、昭和五年拾壹月同第十一回展覽會ニ「望鄉」ノ圖出品

一、昭和六年拾壹月同第十二回展覽會ニ「晝三昧」ノ圖出品

一、昭和七年拾壹月同第十三回展覽會ニ「角とぐ鹿」ノ圖出品

一、昭和八年拾壹月同第十四回展覽會ニ「峽中ノ秋」ノ圖出品

一、昭和九年明治神宮聖德繪畫館壁畫完成

一、昭和拾年大禮紀念京都美術館落成紀念綜合美術展覽會に「菅むす庭」ノ圖出品

一、其他佛國、伊太利、米國、獨乙、瑞西、朝鮮等ノ展覽會ニ「孔雀」「鹿」「蒿」「うまや」「雪曉」「雪中鹿」「獅子」ヲ出品ス

吉野懷古自畫賛

老杉矗々雨霏々　想到當年國步非

[illegible]

木島櫻谷氏を想ふ

森　源之助

私は今大阪にて些かな軍事工業の經營に從事し藝術界とは最緣遠き者なるも性來美術に聊か趣味を有すると櫻谷君とは幼少の頃よりの友人なるを以て其角度より視て櫻谷君を偲ぶ事も意義なきに非ずと思惟す。

私は京都市上京高等小學校を卒業するや京都市立商業學校に受驗入學し始めて櫻谷君と相識るに至れり、櫻谷君卽木島文治郎君は二番で私が三番で席相隣り居りし如く非常に眞面目な、溫厚な、勉强家なりし事を記憶す。然るに同校は所謂中京の富有なる商家の子弟多く、豐かならざる私は何かに不快を感じ一年足らずにて退學し京都一中に轉じたりしが木島君も亦幾何もなく、退學して今尾景年畫塾に入り丹靑の道にいそしまるゝ事となりしを仄聞せしが春風秋雨十數年其間全く久濶に打過ぎたり。

歲月流るゝが如く日露戰爭も終局を告げ明治四十二三年の頃より櫻谷君は三十二、三歲の靑年の身を以て連年文展の最高峰たる二等賞に入選し萬丈の氣焰を吐き、名聲大に揚り世人を一驚せしめたりき。私は東京帝大卒業後直に住友に入り當時倉庫神戸支店支配人なりしが其盛名の畫家が疇昔の文治郎君なるを確めし上一書を差出せしに來遊を促され爾來屢々訪問乃至書翰の取やりを爲し雅俗の意見を交換し舊交を溫めたり。同君書翰には偶成の詩を添へ感慨を漏さるゝこと多かりき、尙後日令閨が私の亡妻と同窓にて且遠緣に當るを互に知るに至り益々親交の度を加へ意氣相投合し時事を談じ世上弊風を痛論して時の過るを忘るゝことも少なからざりき。

吉野懷古自畫賛

老杉嵐々雨霏々　想到當年國步非
春淺芳山人不見　延元陵上白雲飛

櫻谷君は元來純眞にして眞摯の人なる上に長ずるに及び漢學より轉じて陽明學に傾倒せしを以て皇室尊拜の念篤く勤王志士の氣魄を賞揚し殊に渡邊崋山先生を敬慕し其詩畫を座右の友とせし程故、壯年期より晩年に入るに從ひ益謹嚴、質實なる古武士の風格加はり、又內省的で報恩の志篤く親族故舊の世話には金錢を不惜、吾人をして感動せしむるもの不尠しも自ら奉ずること極めて薄く、常住座臥粗末なる木綿袴を着用し野人の風あり、洋服は一着も所持せず京都の新京極なる歡樂地域(東京の淺草、大阪の千日前に相當の個所)は一回も通行せしことなく、藝妓の侍する宴席は謝絕する等幾分奇癖、潔癖あり、之を以て守錢奴とて惡聲を放つ畫家の一派あるも此等は取るに足らぬ色盲患者のみ。

嘗て京都有力畫塾の一方の旗頭たる相當の畫家(其名は態と差控ゆ)が何と考へてか櫻谷君を蓄財家なりと蔑み賤みし一書を京都某新聞に投書せしと見え、櫻谷君大に赫怒し反擊文を載せし新聞を偶々、私は東上途中京都驛にて入手し櫻谷君の面目躍如たるを喜びしことあり、其大意今猶記憶に新なり。

一、自分は唯天職に精進の傍ら聖賢の書、勤王志士の文を求め之を愛讀せるも諸君の如く、狹斜の巷に出入し千金を散するの愚を爲さず、故に幸に衣食足るを感謝す。

一、廣大なる土地を購入し大に金儲を爲せりと非難さるゝも市中の陋屋より只衣笠山麓の新居に移りしのみ爾來交通開け地價高騰せしことゝ思はるゝも賣却してこそ金儲けとなるも自分は邸宅を築きしに不過一坪の土地も賣却せしことなし眞僞宜しく村役場に就て取調べらるべし

と、的中彈を以て酬ひければ敵砲臺忽ち沈默に陷りしと想像し車中

內省)

一、大正拾貳年五月貳拾九日高等官五等ヲ以テ待遇セラル

一、大正貳年拾壹月前同會ニ「驛路ノ春」ノ圖出品
一、大正參年拾壹月前同會ニ「涼意」ノ圖出品
一、大正四年拾壹月前同會ニ「うまや」ノ圖出品
一、大正五年拾壹月同前會ニ「港頭ノ夕」ノ圖出品
一、大正六年拾壹月前同會ニ「孟宗籔」ノ圖出品

一、昭和九年明治神宮聖德繪畫館壁畫完成
昭和拾年大禮紀念京都美術館落成紀念絲合美術展覽會に「青むす庭」ノ圖出品
一、其他佛國、伊太利、米國、獨乙、遲羅、朝鮮等ノ展覽會ニ「孔雀」「鹿」「鳥」「うまや」「雪曉」「雪中鹿」「獅子」ヲ出品ス

大に痛快を覺えしことありき。

櫻谷君は一見溫厚の如きも、胸中烈々たる意氣を有し、毅然として節を枉げざる氣骨を藏せることは京都人には珍らしき存在なりき其師景年翁の恩義に感激終生能く奉仕する所ありしは勿論其他諸先輩に對しても十分の敬意を表することを忘れざりしも阿諛迎合する如きことは斷じて爲し能はざる性格なるを以て言行頗忠信にして文帝展審査委員としても有力者なりとて遠慮會釋なく公平振りを發揮せしことゝ思はれ、正論者より敬意を拂はれしも一部の人より白眼視され敬遠されしことは免るゝこと能はざりき。

同君の景仰せる畫家には古くは渡邊崋山先生。近くは故平福百穗畫伯、川合玉堂畫伯、橋本關雪畫伯等ありき。

要之、櫻谷君こそ藝術家らしき藝術家にして社交とか商人の操縱とかに付ては全然無關心にして只管斯道に精進し頑健なる體質に非ざりしも寢食を忘れ繪三昧境に入り且珍らしき健筆家なりしを以て友人知己の依賴を受け一時相當多作を見るに至りしものと思はる。

高潔なる人格と、深き學識と優れたる靈筆と堂々たる經歷とを兼備せる櫻谷君は夙に屢々帝室技藝委員に擬せられながら終に其實現を見るに至らざりしは同君の長所でもあり短所？でもある硬骨が、禍せしものとしか考へられず、同君と其短所を共有する私としては尙更同君の爲めに痛惜もし同情に耐へざる次第なり。

櫻谷君も、さすが、晩年は多少寂寞を感ぜしと見え、左の二詩を送り來り感慨深く三誦せしことありき。

一　門徑蕭然客路疎　鳴禽綠樹繞茅廬
　　吾生快事多無願　閑對靑山讀好書

一　浮名何願一時譽　養拙不如眠草廬
　　知否個中幽趣足　焚香日對古人書

乍去今回其遺作展覽會場を訪ひ人物、花鳥、動物、山水、何れも堂々たる妙作に接し今更ながら其足跡の偉大なるに驚喜を不能禁、感慨を新にせり實に櫻谷君の如きは後世に至り益其眞價を發揮し馥郁たる淸香を千古に放つものと確信し、櫻谷君の靈に合掌三拜するものなり。

退院後數日に不過、疼痛未だ全く不去と頻々たる來客との爲め推稿の暇なく、妄言多罪。

木島櫻谷氏の事ども

芝　千秋

木島櫻谷君の遺作展をなつかしく拜見して第一に感じたことは、同君が非常に惠まれて居られる事であると思つた。其第一は、君が天性畫家として立つて行く上に大變都合よき素質たとへば、能樂家などで言へば天性の美聲とでも言ふべきもので、少々の缺點（ト言テハ失禮ナガラ）なぞも大概は氣がつかず一見してアツと言はして感心させてしまふ。何と言ふか、妙筆とも言ふべき才能を持つて生れられた事である。これは實に少年時代からの事で、同君が下京高等小學校の三年生時代（只今の高等一年）明治二十三年に東京に內國勸業大博覽會が開かれた時京都教育界より拔擢され鉛筆畫を同博覽會の教育館に學校より出品された事でも分ると思ふ。尤其頃の圖畫の學科も寫生なぞは全然なく全部教科書の臨摸であつた。この畫は、畫用紙二つ切位と覺えて居るが原本は其當時の圖畫受持の只今の一德會主幹柴田謙堂先生が、寅三郎として訓導を勸めて居られたので多分同先生の畫と思ふが、楠公櫻井驛決別の圖で馬上の大楠公が地上に立てる小楠公を見下してゐる處で、背景に松樹があり中々密畫であつたと覺えて居る。トニカク小學生としては中々の大作であつた。我々は二十三年の三月に卒業した故博覽會開會當時は學校

以上の如き狀態で、しぜん畫家にも知音を持たれ、特に今尾景年先生は同町內に、大和畫の榊原文翠翁は隣家に、岸竹堂氏は別懇に と言ふ調子で、畫家と言ふ者に對して深き理解と同情を持て居られ

乍去今回其遺作展覽會場を訪ひ人物、花鳥、動物、山水、何れも堂々たる妙作に接し今更ながら其足跡の偉大なるに驚喜を不能禁、

焚香日對古人書

を出て居て知らず其畫もどうなつた事か分らぬのは殘念である。同君は當時十三才であつたと思ふ。

第二は御家庭である、君は明治十年三月に京都三條室町で生れられたのである。一女三男の次男であつた。三條室町と言へば、人も知る京都の算盤の中心地である。そして同地の明倫校で教育を受けられたので、僕は小學生時代同級で幼年の頃しば〳〵寄せて頂いて今でも心に覺えて居る印象がある。同家の御商賣は茶道具との事を聞いて居るが、いつでもきちんと片附てあつて、まるでお商賣なぞはない樣であつた。只壁間に掛けてあつた數奇屋笠を見て同君と一處に其大なるに可笑しく思つて笑ひ合つた位であるが、ある日曜の朝よせて頂くと、令姉が手拭を頭にかぶつて室内を掃除して居られた、それで二階で遊ばうと板間を行きて梯子段の横のふと隣の開いてある襖間を見るともなしに見るとそこは茶室で、同君のお父さん相當の御年輩で白髮(この白髮は同君にも遺傳してゐる樣である)の方が釜の前に居られて一方の壁ぎわに同君の大伯母さんと言ふ事ですが抹茶茶碗を兩手に膝の上にして品のよい老婦人がきちんと端座―何か和かに居られる。如何にも三條室町の算盤長のうれんと變つた空氣を感じた事は今でもはつきりと思ひ出せるのである。

そして御一家が頗る好學のお家であつて、其頃の小學校は今の樣に義務制でなく商人に學問は不要とあつて、もの〻二三年も學校へ入れたら退學させて、奉公に出すのが多數であつた。其中に同君の令兄は明倫校でも上級まで進まれ、新年の始業式などにはいつも生徒總代として祝詞を讀まれ後今の府立一商の前身商業學校のたしか第二回位の卒業生として只今實業界に活躍して居られる、この方も中々畫才の有つた方でよく我々は鉛筆畫を見せて貰つたものである右樣の御家庭故か、學校の成績も中々よい方で其頃連級と言つて只今で言へば尋常二年生からすぐに四年生へ飛ばれた事もある程であつた。それに父君も令兄も和歌を樂まれ數々の詠草もあるとの事である。

ので多分同先生の畫と思ふが、楠公櫻井驛決別の圖で馬上の大楠公が地上に立てる小楠公を見下してゐる處で、背景に松樹があり中々密畫であつたと覺えて居る。トニカク小學生としては中々の大作であつた。我々は二十三年の三月に卒業した故尋常覺會同會當時の學校

以上の如き狀態で、しぜん畫家にも知音を持たれ、特に今尾景年先生は同町内に、大和畫の榊原文翠翁は隣家に、岸竹堂氏は別懇にと言ふ調子で、畫家と言ふ者に對して深き理解と同情を持て居られた御家庭であつた。

君は小學校卒業後令兄の跡を追ふて商業學校に入られたが、其當時少年間に流行せる四五人の同志を集めて少年錦襄こんにやく版刷の雜誌を作つて居られた。其編輯から印刷製本から插畫迄君一人でやつて居られ、特に口繪に入れられた水戸義公の像の如きは中々うまいもので、筆まめの方で有つた。

其後父君の喪と其頃發行せる山縣五十雄氏(?)の少年園と云ふ雜誌の「藝術家たるも亦快なり」とかの論文に刺戟されて畫道に入られたとの事である。

今尾塾では其頃平子鶴友氏、岡本月村氏など同時代であつて、平子氏は後東上されて平子鐸嶺と更めた、今尾塾在學當時からおれは畫家には成らぬ川崎千虎さんの樣な人になるとの事であつたさうなが果してそう成られた(これは同君よりよく聞いたのである)其後漢籍を山本章夫先生に學ばれた。其當時の同門には俳人の栗津水棹氏花道の西川一草亭氏などがあつた。

君の通學姿で特に目立つた姿は用心深い事で、一寸した溝河でも飛越さずに橋の方迄廻るとか、少しの曇天にでも雨傘を持て行かれるとかで、ことに雨傘の駄賃持の姿は大分其頃の人に見覺えられて居た樣であつた。

畫をやられて間もない頃と思ふ、同君の町内の同年のO君S君と僕を加へて四人で比叡山へ行つた事があつた。其頃の事故無論草鞋ばきで白川口より中堂坂本から大津に入つた時は既に夕刻であつたそこで歸路は二派になつた、片方は只今の大津驛迄行つて汽車で歸らうと言ひ、僕は大津の八町から大津驛迄歩いて又七條から三條迄歩く事を思へば一その事此儘歩いて歸ると言つてO君S君は汽車、木島君と僕とは徒歩、月夜とは言ひながら秋の夜道の大津街道を歸

つた。道々同君はあのOSの兩君は共に御兩親揃て居られ何不自由なき人々であるが、自分は只今は父をなくして兄に學資を仰いで居る身分なれば、汽車で歸れば樂で歩けば苦しいが、これがせめてもの兄へ對する我志であるとの意味の言を道々話された事であつた。

右の如く同君は天賦の性能と理解ある家庭の指導と安逸を欲せざる同君の努力とが相合して成功せられたるものと思ふ。

同君は初めは人物畫殊に歴史畫武者畫に志されたが、其當時の京都には歴史畫の專門の方なく研究機關もなく、今尾塾は花鳥專門なり、これには大分苦心された樣で、小堀鞆音、松本楓湖等の挿畫ある少年雜誌なぞを集めて研究に資されたが、それでも其頃は待賢門の義平重盛、爪生保の雪中苦戰等を展覽會に出品されて居たがあまり報ひられず却つて出世作は野猪で其より名聲を擧げついに動物畫家として名を出された事は周知の次第で、それでも歴史畫に對する熱心は最後迄も持て居られた樣である。

最後に序ながら思ひ出るのは君の令弟桃村君の事である。桃村君は名は米三郎たしか君とは三つ下の明治十二年生と思ふ。櫻谷君よりは一段と立派な體格と鷹揚なる風貌の持主であつた。この人も惠まれたる畫才のある人で（つまり三人兄弟三人ながら畫能を持て生れられたので）初めは岸竹堂後は菊池芳文塾に學ばれたが頗る自由な畫風を持て居られて遺作には雅邦調の墨畫もある程であつたが、惜い事には徴兵適齡前後で夭折されたのは返す〳〵も殘念な事である。桃村君もし健在であつて、兄弟手を携へて畫道に切瑳され、鎖國的な今尾塾に養成されてもあれ迄なつた櫻谷君が、他の塾風を桃村君を通して他山の石とせられたならばそれこそ梅櫻桃李一時に開くの盛觀を見。櫻谷君の畫境も更に一段の變化を見たであらうと切に惜みても餘りある次第である。櫻谷君も惜しい、桃村君も尙惜しい。嗟

謹みて妄評を謝す。

櫻谷先生の旅信

大橋松治郎

拙者は櫻谷先生御出生の家と同町に住し古き御馴染にて先生の二十代の頃かと思ふ、貴君がいかほど大家に成られても御旅行の時には必ずスケツチの御端書を願ひますと話し置きたる事あり、其後明治三十八年夏飛驒方面寫生旅行の際不破古關のほとりより第一信を送られ其の後は年々旅行の節は必ず送り呉れられ近年迄も續き其の數壹百以上に達し實に先生の義理固き事には毎々感服致し居りたり其の內容には所見の風物感興の詩文等あり其の二三を左に……

昨夜は不破の古關のほとりにて宿り申候今日より直ちに飛驒の山道に分け入る考へに存候途中郵便不便にて失敬仕候高山着仕候得ば一信差出し可申候　草々　櫻谷生　（自筆草に虫の繪畫添）

風飄雨灑旅衣班　孤杖尙探煙靄間
笠影蕭條君莫咲　芒鞋蹈破萬重山

自筆旅裝草鞋脚袢姿畫添

又中々の御孝心深き方にて斯樣の詩も有り

半生碌々守癡頑　種々懶看鬢已班
幸有北堂猶健在　笑傾椒酒籌慈顏

乙卯歳首　若松の繪畫添

又中々の御話好きにて二三時間に及ぶ事常なりき

不慮の御急逝洵に殘念に不堪、世上に又種々の風說をなす者もあり其餘りにも誤れるを慨嘆しつゝある際此度遺作展の開催されて久しぶりに其の偉大なる作品に接し今更らに畫壇に大なる功績を殘されし事を自他共に痛感せしめられし事は實に喜びに不耐、今更らに兎角の評をなしたる者も影を消す事と平素の先生を知るもの等しく愉快に感ずる次第なり。